

——目を覚ます切っ掛けとは、果たして如何様なものだろうか。

蟬の聲が五月蠅かつたからか。鳥がけたたましく鳴いたからか。周りの竹がざあと揺れたからか。差し込む日差しが眩しかったからか。或いは十分な睡眠を得たからか。寝返りを打った時にどこかをぶついたりしたからか。喉が渴いたからか。腹が減ったからか。

それとも、嫌な夢でも見たからか。

ぐるりと回る視界に頭痛を覚えて、妹紅は開いた瞳をきゅつと閉じた。そうして浮かんでくるのは先程まで見ていた夢の情景。前に夢など見たのは果たしていつの頃だっただろう。久しぶりに横になって休んだ所為かと、そんな事を考えた。

別に嫌な夢だったという訳ではない。どちらかといえばよく解らない、不思議な夢だった。

確かなのはとりあえず目が回ったという事と、おかげですこぶる気分が悪いという事だ。

ぼつんと一人、立っていた。

真つ白な地面に真つ白な空。壁はなく、どこまでもただただ白い、真つ平らな地面と空が続く世界。自分というものさえ曖昧で、何もなく、ただ何もなく。立っていると思っていたが、存在していたのは視界だけで他の一切を感じる事がない。一步を進んだという実感はあつても、足を動かしたという感覚はなく、また地面を踏みしめている感触もない。前を向いても後ろを向いても、上を見ても下を見てもやはり何もなく、やがてその視界がぐるりと回ったかと思う

と、今度はその真つ白な地面が、空がぐるりと回り出した。

白い世界。真つ白な世界。

回っているかどうかも見ただ目には解らないのに、ただ一つの視界は確かにそれらが回っていると認識して、ぐるぐると、ぐるぐると、回り回って回って回って——そうして目が覚めた。

目を回した気分の悪さも幾らか収まったところで、閉じた臉をそろそろと開く。思い出すとまたぐらりと視界が揺れて、少し頭が痛くなつた。

どうしたものかと久しく見なかつた天井をぼんやりと眺めながら、妹紅が緩慢な仕草で視界を覆っていた前髪を払う。髪は容易くさらりと横に流れたが、触れた額の不快感に思わず手を止めた。

寝汗が酷い。

自覚してみれば尚一層。首や腕にもじつと汗が滲み、夜間の内に余程吸い込んだのか、背腹に触れる服の生地がやけに冷たかつた。腹を冷やすだろうか、まだいくらか霏のかかつた頭で考えながら、それでも起き上がる気にはなれず、ごろりと寝返りを打つ。

格子窓から差し込む光を見るに、巳の刻を過ぎた頃だろうか。少々寝過ぎたのもあんな夢を見た原因かと思ひながら、視線は天井から床の上へ。日の当たる部分は暖かさよりも暑さが勝る季節。じりじりと焼かれるような熱を感じる肌とは裏腹に、床の上に散らばつた長い髪は陽光に照らされて、日の中だというのに星のように煌めいていた。

試しにいくらか纏めて摘み上げると、先程払った前髪と同じように、離れた先からさらりと落ちていく。寝汗でべたつく肌とはあまりにも対照的で、妹紅にはそれが自分のものではない、何かの飾り物のように思えた。

白い髪。真つ白い髪。

何も生まれた頃からこのような色だった訳ではない。

不死となる前、まだ妹紅がなんの変哲もないただの人間だった頃は、髪も人並みに黒かったのだ。人は大勢居たのに、関わる相手の少なかつた家の中、それでも何人かの女中には綺麗な髪だと褒められた事もあった。いつから今のようになってしまったのかは思い出せないが、あの時自分の髪から色が失われているのに気付いて愕然とした事は覚えていてる。

不死の体。死ねない体。例えば粉微塵にされようとも、瞬時に元に戻ってしまう。死んでもいない、生きてもない、老いることなく病むことなく、育つことのない蓬萊人。

けれど、そんな状態でもほんのいくつただけ変わるものがある。

何も食わなければ腹は減るし、病にはかからずとも今のように体調を崩す事はある。放っておけば爪は伸びるし髪も伸びる。文字通り死ぬほど苦しい思いをしたくなければ、結局人として人らしい生活をしなければいけないのだ。

蓬萊人となつても人を辞めたつもりのない妹紅にとってみれば、それらは有り難い事だったのだが、人であろうと思えば思うほどに、この白い髪が現実を突きつけてくる。

昔々に誰かが言っていた。人の髪が色付いているのは生きるために必要だからだと。

最近だと紫外線がどうのという話も聞いたが、つまりはこの体はもう生きるための何かを必要としていないのだ。蓬萊の薬によつて全てが無効化されてしまう、言つてしまえば、死んでも構わない。この体では、もう髪を黒く彩る必要がないという訳だ。

恐らくは目の色も同様なのだろう。髪が色を失つた頃から、妹紅の瞳は白兔のような紅い色へと変わっていた。

改めて見てみれば、肌もどこか普通の人よりも白い印象を受ける。藤原の家にした頃は外に出る事が許されず、そのおかげで元々色が白かったのが原因かと思つていたが、果たして真相はどちらなのか、今の妹紅には解らない。誰かに聞けば解る事かもしれないが、どちらであれ答えを知る気にはなれなかつた。

もう一度床に散らばる髪を掬い上げて、さらさらと流していく。

白い髪。真つ白い髪。

真つ白な世界。

幻想郷に来てから忘れかけていた、かつての日々が脳裏を過ぎる。

なるほど、そうしてみればやはり嫌な夢だったのかもしれない。

そんな妹紅を嘲笑いにきたのか、外で蟬が一匹、けたたましく鳴き始めた。

「なにやっつてんだろな、私……」

愛用の小刀で竹串を削りながら、愚痴のひとつも零してみる。手元を見ずとも竹串くらいは削れるが、それ故に集中する必要もなく、おかげで余計なことをつらつら考えてしまい、ついつい愚痴のひとつも零れてしまうといった塩梅だ。

「よし」

とりあえず一本仕上げ、空に透かして確認する。後で軽くヤスリをかける必要はあるだろうが、反りもなく、ささくれもなく、それなりに満足のいく出来だった。思わず口元が緩む。我ながら単純だと思いが、何かを上手く作れた時というのは何だか理由もなく嬉しい。そういう時は飾りのない、心からの笑みを浮かべることができなのだ。それは浮かべるではなく、滲み出るといふべきかもしれないが、そういう顔のできる自分は結構幸せなんじゃないかと、そんな心地になれてしまったりする。

「ほらほら、いつまで掛かってんのー？ 次は薪割りだよー。日暮れまでに終わらせないと、お客さんが来ちゃうじゃない！」

「へいへい」

せつかちなオナーの催促に軽く肩を竦める。やれやれと首を鳴らして立ち上がり、削った竹串を掻き集めて皿に並べると、次の仕事に取り掛かるべく支度にかかる。

私の名は藤原妹紅。

今の私は不死の鳳凰ほうおうでも、竹林の守り人でも、健康マニアの焼き鳥屋さんでもなく、小さな飲み屋の——しがないウエイトレスさんである。

§

どうしてこうなったのか。

話せば長くなるものの、我が身の不幸を知ってもらうためには我慢がまんして聞いてもらうしかあるまい。正直なところ思い出すのも忌々いまいましいが、しなくては話が始まらない。あれだ。説明責任せきにんってやつだ。誰に対する責任なのかは不明だが、そこは考えてはいけないうことだと本能が警鐘しやうしゆを鳴らしている。まあ、そういうメタな話は置いておくとして、とりあえず説明を始めるとしよう。

竹林を歩いていると、突然輝夜が襲い掛かってきた。

当然、私は問答無用で蹴り飛ばした。

しかし敵も然るもの引ひっ掻くもの。蹴り飛ばされてなお、きーきー喚わめきながら襲い掛かってきて、仕方なくいつもの弾幕ごっこへと移行したのである。

その後のことは——正直なところあまり覚えていない。

頭に血が上ると周りが見えなくなるのは私の悪い癖であるが、気がつくとも竹林の一部が炎上

していた。それ以外は里の建物の一部が半壊し、夜雀よすずめの屋台が爆発炎上したくらいのも、まあ、言つてしまえば慎ましいものである。とりあえず暴れる輝夜を簀巻すまきにして必死の消火活動を行つたものの、火を消し止めた頃には朝になつていて、如何に蓬萊人いかにとはいえ無限の体力を誇るわけでもなく、体力の限界を迎えた私は疲労困憊ひろうこんばいの極みで焼け野原に大の字になつて寝転んでいた時の話だ。

ちなみに里の方は輝夜の責任だったので、簀巻すまきにしたまま慧音に引き渡している。

その後どうなつたかは知つたこつちやないが、どうせそのうち誰か迎えにくるだろうし、例の薬師によつて里に対する補償はつつがなく行われるだろう。どうせならできるだけ迎えが遅れて、思う存分里の吊るし上げを食らつてりゃいいと思う。ちつたあ反省しろ、マジで。

とまあ、いつもどおりの。

こつちとしては心底勘弁して欲しいとは思いつつも、よくある日常のページとすることで、このまま忘却の彼方かなたに沈めて欲しいような出来事だつたのだが——一つだけ看過かんかしづらい点があつた。

消し炭となつた屋台の前で、マジ泣きしている夜雀である。

いくら妖怪とはいえ、このまま放つておくのも寝覚めが悪い。なにしろ見た目はいたいけな少女であるのに、鼻水も涙も垂れ流しでびーびー泣いているのだ。流石にこれを放つておけるほど人間辞めてるつもりもなく、限りなく土下座に近い形で謝り倒してみたものの、どうにも

こうにも泣き止んでくれる気配はない。夜雀特有の甲高い泣き声が視力どころか思考能力すらも奪っていき、寝不足と疲労がラインダンスを踊っている私の頭では、どうすることもできず途方にくれるしかなかった。何にせよ、彼女の屋台を完膚なきまでに爆砕炎上させてしまったのが原因なのだし、そうなったのは完全に私の責任なのだから、それをどうにかしないことには彼女の機嫌も直るまい。

だから、まあ、その。

「えーと……うちに来るか？ 辺鄙なところだけど、改装すれば屋台の代わりにはなると思う

し……無論、屋台の方も弁償させて貰うよ？ それまでの、まあ、繋ぎってことだけだ」
彼女がびたりと泣き止む。

泣き止んで、きよとんとした顔で見上げている。

「その、落ち着くまでは……私も店を手伝うからさ」

私の言葉を反芻するように首を傾げ、瞳を覗き込むようにじーっと見つめ、そしてふいに顔を輝かせたかと思うと、

こくこくと——何度も大きく頷いた。